

竹内 洋 著

『立志・苦学・出世』

(講談社現代新書)「376 T1」

読 書 案 内

私は大学院で明治・大正期の受験雑誌の記事内容の分析を行ったが、その参考文献のひとつとして手に取った記憶がある。「受験」に関する諸問題を考えるためには、黎明期の

実情を知っておかなければと思つて手に取った。当時の雑誌や状況がわかる写真が多く掲載されているのと、筆調が軽妙であるのとで楽しく学ぶことができ

た。「最近の受験生はスマホでゲームばかりしていて勉強しない。昔の受験生は…」といった文言を目に(耳に)したことはないだろうか。また、「苦しい受験生活」はいつの時代から始まったのか疑問に思つたことはないだろうか。私は大学の先生に「現状を知りたいならそこに至るまでをわかつかないと見えるものも見えてけえへんで」と言われたことがある。現状の苦

しさの根源を見てみることで、何か光がさすかもしれない。いつの時代も同じような人間がいたんだなあと考えるのではないかと予想している。本書は明治

四十年の受験生の受験当日にタイムスリップする形で始まる。当時の受験問題なども適宜掲載されているので、今の皆さんなら「解けるかどうか」も楽しみの一つになるだろう。竹内先生は他にも多くの著書を出版されている。内容はもちろんだが、あとがきには竹内先生の人柄とお茶目さが色濃く表れていて面白いので、そこにも注目してほしい。

川村 元気 著

『世界から猫が消えたなら』

(小学館文庫)「913 T97」

辻村 深月 著

『ツナグ』(新潮社)「913 K109」

「死んでしまった後、わたしはいつたようならなるだろう。」また、「明日死ぬとしたら、最後に何をするか。」と、考えて様々な想像を巡らすことがあり

ます。夜寝る前の布団の中や、お風呂で湯船に浸かっていると、身近な人が亡くなってしまったとき…。

皆さんも、自分が死ぬ前のこと、死後の世界のことについて一度は考えたことがあるのではないのでしょうか。「自分が死ぬ前には家族と一緒に過ごそう。」「死んでしまった後も天国や地獄で魂として存在し続けるのではないか。」など様々な考えがあるとあります。

「死」というものは、誰しもがいつかは直面する、人間すべてに平等に与えられる経験です。だからこそ私たちは「死」に対して恐怖を感じたり、ある意味では期待を抱いたりもするのではないかとわたしは思っています。

今回紹介する『世界から猫が消えたなら』『ツナグ』の二作品は、「死」にまつわる物語です。どちらも、「死後の世界はこうだ!」というような答えを出すものではありませんが、「死」というものを通して自分の生き方や人との関わり方について考えるきっかけになる作品

だと思っています。

とても読みやすい作品ですので、ぜひ手にとつて、「死」と向き合つてみてくださいいね。

橋本 幸士 著

『宇宙のすべてを支配する数式』をパパに習つてみた』

『超ひも理論をパパに習つてみた』(共に講談社)「429 HA」

2012年のLHCの実験でヒッグス粒子の存在が確認され、素粒子標準理論の正しさが、最終的に実証された。

素粒子標準理論とは、素粒子に働く力(相互作用)をゲージ理論という枠組みで統一的に説明するものだ。私は初めてこの理論を学んだとき、「自然はなぜこれほど美しく作られているのか?」と感動で鳥肌が立った。では、標準理論の確立をもつて素粒子論は完成したのだろうか?否!時代は「標準理論を超える物理」の探索に向かうとともに、未解決の重力の統一をも実現すると期待される究極の理論「超ひも理論」も精力的に研究されている。

冒頭の二冊の書は、これらの研究をわかりやすく説明したものだ。しかし、大事なところは、ごまかさずそれを記述する数式もきちんと載っている。

実は著者の橋本先生は、昨年度、私が大学院で従事した研究のお師匠さんである。師匠と言つても、私より10歳も年下の大学の後輩だが、私はこの先生をととても尊敬している。その研究業績の華々しさもさることながら、理論研究の苛酷さに心が折れそうになる私をいつも温かく励まして下さった。そんな教育者としても立派な橋本先生の手によるこの本によつて、皆さんの自然科学への興味が深まればとてもうれしい。

新渡戸稲造著 山本博文訳

『現代語訳 武士道』

(ちくま新書)「156 N1」

選手宣誓で「正々堂々」という言葉をよく聞きますが、ルールを守る(フェアプレー)という以上の内容を、私は含んでいるように感じます。また、昨今、政治や経済でも「正々堂々」が

求められているようです。なぜ、私たちは「正々堂々」を好むのでしょうか。

本書は、「あなた方は宗教教育無しに、どうやって子孫に道徳を伝えているのか」と問われ即答できなかった著者が、当時の日本人の道徳意識や思考方法の基として「武士道」について、英語で著したものです。そして、多くの国において翻訳・出版されてベストセラーとなり、国際社会にデビューしたばかりの日本を理解するためのツールとして非常に大きな役割を果たしました。

これから国際社会で活躍していく皆さんには、様々な考え方や価値観の存在を理解し認め合うことが求められます。そのためには、自己の根底に何があるのかを知っておくことも必要です。本書は欧米人向けに書かれたもので、現代人の私たちにとっても、理解しやすい記述になっていると思います。私は本書を読んで、我々が受け継いだ文化に少し誇りが持てました。

本書の「武士道」には、著者の個人的解釈が多く含まれている

るという指摘もあります。また、現代の倫理観には合わないこともあります。皆さんには、そういったことも踏まえて、読んでもらえればと思います。

宮本武蔵 著 渡辺一郎 校注
『五輪書』岩波書店「081166」

中学、高校、大学と十年間陸上漬けの毎日。本などほとんど読んだことがない私が、大学時代に読んだ数冊の本がある。その中の一冊が宮本武蔵の『五輪書』だ。大学の時代の恩師の影響で読んだ。もちろん、原文など読めない。わかりやすい解説付きだ。

読 書 案 内

宮本武蔵の時代は真剣で切りあう時代。負

けは死を意味する。そんな時代に生涯六十余戦負けなしである。しかも、ほとんどが切られて死んでいくのに対し、六十一歳まで生き、最後は老衰で最後を迎える。まさに大往生。そんな生涯負けなしの宮本武蔵が、兵法を書いたのが『五輪書』である。なぜ生涯負けることがな

かったのか。その真髓がここに書かれている。

宮本武蔵の時代は死ぬか生きるかの時代。勝負にかける心構えが違う。今の時代、勝負にやぶれても死ぬことはない。手を抜いてやっても死ぬことはない。しかし、それでは勝負には勝てない。勝負には全身全霊をかけて挑まなくてはならない。これは、勝負の世界だけの話ではないと思う。何事に対しても言えることではないだろうか。

格下の相手との勝負で、「どう勝つか」と考えていると、あっさり負けてしまうものである。そういった宮本武蔵の「心」の持ち方・在り方に、大学時代の影響を受けた。この本には、兵法以外にもこういった「心」に触れた部分がたくさん書かれている。

今の時代だからこそ、必要なことが書かれてあると私は思う。ぜひ一度、手にとってもらいたい一冊である。

井上 理津子 著

『葬送の仕事師たち』
(新潮社)「67311」

みなさん、葬儀を出すにはどうすればいいか知っていますか。

昨年父が亡くなり、葬儀社に電話をすると、すぐに担当者がかけてくれました。

そして、お通夜や告別式の段取りの全てを相談して行い、無知の私でも悔いなく父を送ってあげることができたのです。そして葬儀社の方々のさり気ない様々な気遣いがとてもありがたく感じ、こんなサービス業があるのかと改めて知りました。

そして、こういう勉強をしてこのような仕事をしているのか知りたいと思いました。

この本は、葬儀社で働く人や納棺師、火葬場で働く人、それらを目指して勉強する人など葬送に関わる仕事について書かれています。

決してきれいな仕事ばかりではないですが、故人のこと、見送る家族の気持ちを考えて仕事

をされていることが感じられて感動しました。

高校生の皆さんにとつてまだまだ関係の無い世界のことかもしれない。けれども、誰にでも死は訪れるもの。

自分ではなかなか知ることができない世界を知ってみませんか？

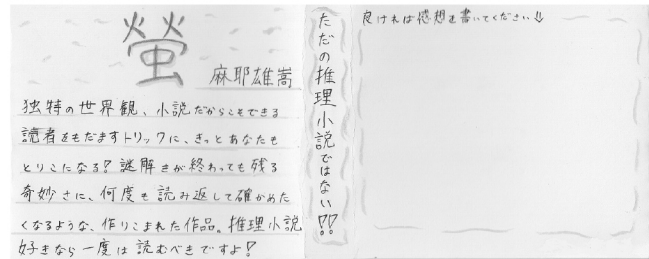
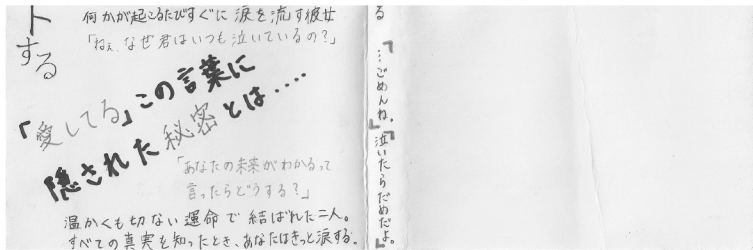
「本を遊ぶということ」

本の使い方は、なにも「読むこと」だけではありません。押し花を作ったり、重石の代わりに使ったり、かつてズボラだった僕は布団の上でカップ麺を食べるための平面を雑誌で確保していました。本をどのように使うかは皆さんの想像力次第なのです。

本の遊び方も同じように「読むこと」だけではありません。ここでは「読むこと」以外の本の楽しみ方を二つ紹介します。どちらも132期生の国語の授業で行ったものです。

【本の帯を作る】

元々は図書館サポーターの人たちが行っていた活動です。まず夏休みの課題として本の推薦文を書いてもらい、その延長として本に帯を付けてみました。帯の目的は、それによって誰かの手に取ってもらうことですから、一目で人を惹き付けるような効果的なものでなければなりません。これが意外と難しく、文字の色・大きさ・レイアウト等々かなり試行錯誤していたようです。



【直観読みブックマーカー】

悩み多き高校生。時に本の中に人生の答えを求めることもあるでしょう。でも、一冊を通読している時間もなく……

そんなあなたには「直観読み」がおすすぬ。悩みを思い浮かべ、祈り、開き、指を指す。そこに現れた一文があなたの悩みに対する答えなのです。ポイントは、祈りということ。イエスも言っていました。「求めよ、さらば与えられん」と。本の神を信じましょう。

